様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６８７００７５

研究課題名（和文）反差別と脱差別：現代インドの仏教組織と仏教僧佐々井による関係的差別克服の取り組み

研究課題名（英文）Anti-discrimination and De-discrimination: Efforts to Address Relational Discrimination in Contemporary India by a Buddhist Organization and a Buddhist Monk Shurei Sasai

研究代表者
根本　達（NEMOTO, Tatsushi）

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：４０５７５７３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では6回（計4カ月半）にわたる人類学的な現地調査でデータを収集し、現代インドのナーグプル市近郊の農村Uで反差別運動に取り組む仏教徒（元不可触民）組織SBSと、ナーグプル市を活動拠点とする仏教僧佐々井秀嶺の社会参加仏教を比較分析した。この分析を通じて、それぞれの「反差別（差別に抗する連帯の形成）」と「脱差別（差別から逃れる場所の創出）」の取り組みを考察し、ナーグプル市及び近郊農村において仏教徒が直面する関係的差別を克服する方策を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on contemporary anti-discrimination movements in Maharashtra, India, by conducting six anthropological field surveys across a span of three months. Based on the data collected, it compares the socially engaged Buddhism of a Buddhist (ex-Untouchable's) organization called the SBS , which spearheads movements in a village named U near Nagpur City with that of a Buddhist monk Shurei Sasai's approach; he is based out of Nagpur City. Through this comparative analysis, this study examines the efforts that have been made towards "anti-discrimination" (creating solidarity against discrimination) and "de-discrimination" (creating avenues to escape from discrimination), and discusses ways to overcome the relational discrimination faced by Buddhists in and around Nagpur City.

研究分野：文化人類学

キーワード：南アジア研究　差別論　当事者性　社会参加仏教　アンベードカル　佐々井秀嶺　元不可触民　現代インド

**１．研究開始当初の背景**

(1) 20 世紀後半以降の現代は、「後期近代」（ギデンズ 1993）とも呼ばれ、「グローバルな『アソシエーション革命』」（Salamon 1994）が発生した時代とされる。この時代の特徴は「市民社会」、つまり、「家族と政府の中間的な領域にあり、社会的アクターが市場の中で利益を追求するのではなく、政府の中で権力を追求するのでもない領域」（Schwartz 2003）が急速に拡大したことにある。このような時代状況の中、ベトナムの禅僧ティック・ナット・ハンが 1960 年代に「社会参加仏教」を提唱し、現代における仏教の存在意義を示した。現在この用語は、「個人的・来世的な意味の解放ではなく、社会的・経済的・現世的な解放を目指す運動」（Queen 1996）、また、仏教者が仏教教義の実践化として社会活動を行い、その影響が一般社会にも及ぶという「仏教の対社会的姿勢」（ムコパディヤーヤ　2005）と定義されている。以上の議論を踏まえ、「現代の社会参加仏教」を再定義すると、「市民社会と呼ばれる領域で公共的な目的のために仏教教義を基盤として活動する仏教組織や仏教者」を意味するものとなる。

(2)現代インドの「社会参加仏教」として第一に名前が挙がるのは、指導者 B・R・アンベードカル（1891-1956）を支持する仏教徒たちの宗教社会運動である。アンベードカルが 1920 年代から開始した「不可触民」解放運動は、1956 年にナーグプル市で 30 万人以上の「不可触民」が仏教へ集団改宗するに至った。この運動は現在もマハーラーシュトラ州を中心に継続しており、北インドの UP 州（Hardtmann 2009, Narayan 2011）や南インドのカルナータカ州などにも影響を及ぼしている。一方で、Zelliot(1969)を除き、改宗運動の中心地ナーグプル市での現地調査に基づく研究がほとんど行なわれておらず、国内外の南アジア地域研究において大きな空白となっている。歴史的な変遷を経た現在、この宗教社会運動は仏教への改宗運動、仏教復興運動、差別撤廃運動、地位向上運動など様々な側面を持つことになった。本研究では「現代の社会参加仏教」の定義を踏まえ、特にこの運動の「差別撤廃」や「地位向上」の側面に目を向け、ナーグプル市及び近郊農村において「市民社会と呼ばれる領域で公共的な目的のために仏教教義を基盤として活動する仏教組織や仏教者」を研究の対象とする。

**２．研究の目的**

(1)本研究は、現代インドのナーグプル市近郊の U 村で 2000 年代後半から活動する仏教組織 SBS と 1960 年代後半からナーグプル市を中心に全インドで活動する仏教僧佐々井秀嶺（1935-）の取り組みに着目する。本研究では人類学的な現地調査（合計 4 カ月半）を通じてデータを収集し、被差別部落研究を中心に蓄積されてきた差別の社会学の議論を分析の視点とする（桜井 2005; 佐藤 2005; 野口 2000; 好井 2007）。差別の社会学では、「差別の機能が何であれ、それが被差別者の特性や固有性とはほとんど無関係であることは明白である［中略］『差別』は『差異』などに根拠を持ってはいない」（江原 1985）、また、「［あらゆる差別現象は］社会におけるさまざまな制度や構造やネットワーク上における、人びとの布置連関や位置関係といった関係的要因に起因する関係的差別（ないし構造的差別）としてとらえるべき」（三浦 2009）など、差別問題の分析には差別者と被差別者の差異ではなく、差別を産出・持続させる関係性や構造に目を向けるべきと議論されてきた。特に人類学分野で関係的差別の視点をインド社会の差別分析に用いた研究として、差別の構造が「三者関係」（差別者、共犯者、被差別者）にあるとする佐藤（2005）の理論を踏まえた関根（2006）の分析がある。さらに、関係的・構造的差別の克服に向けた議論に目を向けると、八木（2009）が「他者を『もう一人の自己』または『第二の自己』ととらえうる思想性の獲得と、この思想を具現化するための人間関係の組み換え」が必要と述べるように、思想の形成と人間関係の組み換えの重要性が指摘されてきた（佐藤 2005；関根 2006）。

(2) 本研究では、「現代インドの仏教者は、仏教及びアンベードカルの教えを基盤とし、差別撤廃に向けた取り組みの中で、どのような思想を形成し、どのような人間関係の組み換えを行っているのか？」という問いを立て、仏教組織 SBS と仏教僧佐々井の取り組みの比較研究を行い、そこに存在する差別克服への方策を検証する。より具体的に本研究の目的は以下の三点である。

①第一にアンベードカルの宗教社会運動、インドの後期近代化、日本仏教界のインド進出、マハーラーシュトラ州における聖人信仰の影響といった観点から仏教組織 SBS と仏教僧佐々井を考察し、それぞれの取り組みが現在の形に至った歴史経緯を明らかにする。アンベードカルの運動は 20 世紀以降のインドで最大の「不可触民」解放運動であり、近年のアンベードカルへの学術的関心の高まりや UP 州での大衆社会党の政治力拡大から、現代インド仏教徒を対象とする研究の数が増えている。しかし改宗運動の中心地ナーグプル市の仏教徒はほとんど取り上げられていない。同地域を対象とする本研究はこれまでの国内外の南アジア地域研究に存在した大きな空白を埋めるものである。

②第二に SBS と佐々井が対照的な立場にある点を明らかにし、それぞれの「反差別（いかに差別に抗する連帯を形成するか）」の取り組みに加え、「脱差別（いかに差別から逃れる場所を創出するか）」のあり方を考察する。この分析が成功すれば他地域の差別研究

においてもこの成果が利用可能となり、差別問題の通文化的比較研究の道が開かれる。
③第三にこれら二つの「反差別」と「脱差別」のあり方から、それぞれの差別撤廃に向けた思想の形成と人間関係の組み換えのあり方を考察し、関係的・構造的差別を克服する方策を明らかにする。このように本研究は実践的な研究であると言える。

## ３．研究の方法

(1)本研究の方法は以下の三点である。
①まず本研究では、南アジア地域研究と文化人類学だけでなく、再帰的近代化論や政治学の市民社会論など、学際的な視点から先行研究のレビューを行う。特に差別の社会学における関係的・構造的差別の議論を分析の視点として取り入れる。
②次に本研究は先行研究のレビューを踏まえ、人類学的な現地調査を実施する。調査地は仏教僧佐々井が滞在するナーグプル市と、仏教組織 SBS が学校運営を行う同市近郊のU 村となる。マハーラーシュトラ州のナーグプル市は人口約 205 万人の都市である。2001 年インド国勢調査によると、ヒンドゥー教徒約 156 万人、仏教徒約 30 万人、イスラーム教徒約 15 万人、キリスト教徒約 2 万人となる。仏教僧佐々井は 1968 年に同市で仏教復興運動を開始し、1988 年にインド国籍を取得、1992 年にブッダガヤーで大菩提寺奪還運動を開始した。また、U 村はナーグプル市から約 38km の距離にある。SBS の活動家によると村の人口は約 3000 人、そのうちヒンドゥー教徒は約 2600 人、仏教徒は約 400 人、イスラーム教徒とキリスト教徒が 1 家族ずつとなる。2000 年に U 村で設立された仏教組織 SBS は男性 15 名で構成され、2009 年から U 村で他宗教や他カーストの学生も在籍する幼稚園・小学校を運営している。
③さらに本研究では 3 年間の研究成果を取りまとめ、学術誌（『文化人類学』や『南アジア研究』）や学会（文化人類学会や南アジア学会）において研究成果を発表する。

(2)各年度の研究方法は以下の通りである。
①平成 26 年度は先行研究のレビューのほか、人類学的な参与観察の手法を用い、基礎的な第一次・第二次現地調査を実施する。調査期間は平成 26 年 9 月（3～4 週間）と平成 27 年 3 月（2～3 週間）に合計 1 ヵ月間半となる。調査時には英語、ヒンディー語、マラーティー語を使用し、現地研究者 2 名に調査補助兼通訳を依頼する。年度末には計画の練り直しを行い、次年度への準備を行う。
②平成 27 年度は現地調査によるデータ収集が中心となる。まず平成 26 年度の現地調査の成果を踏まえ、データ収集のメインとなる第三次・第四次調査を実施する。調査期間は平成 27 年 9 月（3～4 週間）と平成 28 年 3 月（2～3 週間）に合計 1 カ月間半となる。年度末には計画の練り直しに取り組み、次年度の準備をする。
③平成 28 年度は現地調査に加え、研究発表を実施する。まず平成 26 年度及び平成 27 年度の現地調査の成果をもとに第五次・第六次調査を実施する。調査期間は平成 28 年 9 月（3～4 週間）と平成 29 年 3 月（2～3 週間）の合計 1 カ月間半となる。また第五次調査終了後、それまでの研究成果をとりまとめて学術誌や学会での研究発表に取り組む。なお第六次調査はフォローアップ調査となる。

## ４．研究成果

(1)平成 26 年度は第一次調査（2014 年 8 月 20 日～9 月 14 日）と第二次調査（2015 年 2 月 26 日～3 月 13 日）、平成 27 年度は第三次調査（2015 年 8 月 25 日～2015 年 9 月 11 日）と第四次調査（2016 年 2 月 28 日～2016 年 3 月 16 日）、平成 28 年度は第五次調査（2016 年 8 月 19 日～9 月 3 日）と第六次調査（2017 年 2 月 28 日～3 月 14 日）をナーグプル市及び近郊農村において実施した。これらの調査では SBS の活動家、仏教僧佐々井、現地研究者、ナーグプル市内や近郊農村 U の仏教徒、他宗教信者へのインタビューを実施した。これに加えヒンディー語や英語の資料収集、仏教およびヒンドゥー教の祝祭や儀礼における参与観察などを行なった。

(2)各年度の研究成果は以下の通りである。
①平成 26 年度は仏教徒組織 SBS と仏教僧佐々井に関する歴史的背景を考察することに努めた。より具体的にはナーグプル市及び近郊農村における計 1 カ月半の現地調査を行い、インドの後期近代化、アンベードカルの宗教社会運動、日本仏教のインド進出、マハーラーシュトラ州における聖人信仰からの影響を考察した。これにより仏教徒組織 SBS と仏教僧佐々井それぞれの取り組みが現在のかたちに至った歴史的経緯を明らかにすることができた。
②平成 27 年度は SBS と佐々井の「反差別（差別に抗する連帯の形成）」と「脱差別（差別から逃れる場所の創出）」の取り組みを考察することを目指した。自らの経験を思想の基礎とする仏教僧佐々井は類似性と隣接性を基盤とする反差別の連帯を形成し、他宗教信者同士が宗教分断以前の地平に立つ脱差別の実現を目指している。一方、アンベードカルの著作に依拠する仏教組織 SBS はカテゴリーを重視する提喩的思考方法を基盤として反差別の連帯を形成し、固定的な分断以降の地平での脱差別を目指していることが明らかになった。
③平成 28 年度は SBS と佐々井の二つの「反差別」と「脱差別」のあり方から、それぞれの差別撤廃に向けた思想の形成と人間関係の組み換えに目を向け、関係的を克服する方策を明らかにすることを試みた。より具体的に SBS は他宗教信者や他カーストも顧客とする飲料水配布プロジェクトを行い、同一性

の政治学を通じて自己尊厳を獲得するにとどまらず、自己尊厳への承認他者から得る運動を展開している。佐々井は差別に抗する同一性の政治学と他者を受容する平等という実践を行なうことで、超自然的な力を否定する活動家とこれを肯定する在家信者の両者を取り込み、同一の目標へ向かう反差別運動を率いていることが明らかにされた。このように SBS と佐々井が展開するポスト・アンベードカルの運動について十分なデータを手に入れることができた。

(3)以上の研究成果については学会や雑誌論文、図書で研究発表を行なった。
①平成 26 年度は日本南アジア学会第 27 回全国大会（2015 年 9 月 28 日）において研究発表「反差別と脱差別、今ここに存在する平等－現代インドのナーグプル市と近郊農村における仏教徒と仏教への改宗運動について－」を実施した。
②平成 27 年度は佐々井秀嶺高野山講演第二部（2015 年 6 月 14 日）において「ポスト・アンベードカルの仏教徒運動—南アジアにおける暴力的対立の克服に向けて—」と題する研究発表を実施した。また日本南アジア学会第 28 回全国大会（2015 年 9 月 26 日）において研究発表「如何に当事者となり得るのか？—現代インドで反差別運動に取り組む仏教僧佐々井秀嶺の神話的思考について—」を行った。
③平成 28 年度は『社会苦に挑む南アジアの仏教』（関西学院大学出版会）に「ポスト・アンベードカルの仏教徒運動についての試論－南アジアにおける暴力的対立克服への示唆」を執筆した。『文化人類学』81 巻 2 号には「ポスト・アンベードカルの時代における自己尊厳の獲得と他者の声—インド・ナーグプル市の反差別運動と仏教僧佐々井の矛盾する実践について」を掲載した。また 2016 年度マハーラーシュトラ研究会（2017 年 3 月 25 日）で研究発表「アンベードカルとガーンディーのモデルの翻訳と接続についての試論：D.R.Nagaraj を起点に現代ナーグプルの仏教徒運動を人類学的に考察する」を実施した。

＜引用文献＞
①江原由美子『女性解放という思想』、勁草書房、1985。
②ギデンズ、アンソニー『近代とはいかなる時代か？』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房、1993。
③ Hardtmann, Eva-Maria, *The Dalit Movement in India*, Oxford University Press, 2009.
④三浦耕吉郎「＜ポスト同対法体制＞の構想にむけて」『部落解放』616 号：21-27、2009。
⑤ムコパディヤーヤ、ランジャナ『日本の社会参加仏教——法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理』東信堂、2005。
⑥Narayan, Badri, *The Making of the Dalit Public*, Oxford University Press, 2011.
⑦野口道彦『部落問題のパラダイム転換』明石書店、2000。
⑧桜井厚『境界文化のライフストーリー』せりか書房、2005。
⑨Salamon, Lester M. “The Rise of the Nonprofit Sector.” *Foreign Affairs* 73(4):109-122, 1994.
⑩佐藤裕『差別論』明石書店、2005。
⑪ Schwartz, Frank J. “What is Civil Society?” In *The State of Civil Society in Japan*. Frank J. Schwartz and Susan J. Pharr (eds.), pp. 23-41, Cambridge University Press, 2003.
⑫関根康正『宗教紛争と差別の人類学』世界思想社、2006。
⑬Queen, Christopher, “Introduction: The Shapes and Sources of Engaged Buddhism.” In Engaged Buddhism: Buddhist Liberation Movements in Asia, Christopher S. Queen and Sallie B. King (eds.), pp. 1-44, State University of New York Press. 1996.
⑭八木晃介「「だまし船」の差別論」『部落解放』616 号：12-20、2009。
⑮好井裕明『差別原論』平凡社、2007。
⑯Zelliot, Eleanor. Dr. Ambedkar and the Mahar Movement. PhD Dissertation, University of Pennsylvania, 1969.

## ５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
①<u>根本達</u>「ポスト・アンベードカルの時代における自己尊厳の獲得と他者の声－インド・ナーグプル市の反差別運動と仏教僧佐々井の矛盾する実践について」、『文化人類学』81 巻 2 号：119-216、2016。単著。審査付。

〔学会発表〕（計 4 件）
①<u>根本達</u>「アンベードカルとガーンディーのモデルの翻訳と接続についての試論：D.R.Nagaraj を起点に現代ナーグプルの仏教徒運動を人類学的に考察する」、2016 年度マハーラーシュトラ研究会、東京外国語大学（東京都文京区）、2017 年 3 月 25 日。
②<u>根本達</u>「如何に当事者となり得るのか？－現代インドで反差別運動に取り組む仏教僧佐々井秀嶺の神話的思考について—」、日本南アジア学会第 28 回全国大会、東京大学（東京都目黒区）、2015 年 9 月 26 日。
③<u>根本達</u>「ポスト・アンベードカルの仏教徒運動—南アジアにおける暴力的対立の克服に向けて—」、佐々井秀嶺高野山講演第二部、高野山大学（和歌山県伊都郡）、2015 年 6 月 14 日。
④<u>根本達</u>「反差別と脱差別、今ここに存在す

る平等－現代インドのナーグプル市と近郊農村における仏教徒と仏教への改宗運動について—」、日本南アジア学会第 27 回全国大会、大東文化大学（埼玉県東松山市）、2014 年 9 月 28 日。

〔図書〕（計 1 件）
①根本達「ポスト・アンベードカルの仏教徒運動についての試論－南アジアにおける暴力的対立克服への示唆」、関根康正・根本達・志賀浄邦・鈴木晋介編『社会苦に挑む南アジアの仏教－B.R.アンベードカルと佐々井秀嶺による不可触民解放闘争』、91 頁（39-50 頁）、関西学院大学出版会、2016。分担著。

## ６．研究組織
⑴研究代表者
根本　達（NEMOTO, Tatsushi）
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：40575734